

婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」(6)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林 恵子

八、

愛するメアリーへ

横浜 一八七二年五月十五日

懐かしい故郷のアルバニーで私が貴方たちとお別れて、今日は丁度一年めになります。私は、このホームが故郷の貴方たちのところから遠く遠く離れていることや皆と別れてから長い年月が過ぎ去ったことを考えると、たまらなく悲しくなります。でも神様がずっと私を守って下さり、感謝せずにはいられないほど沢山の良いことをこの一年の間に与えて下さったことを考えると今の私にはとても悲しんでなんかいられないと思うのです。

さて、時間を楽しく過ごすために、そして貴方もぎつと興味をもつてくれるだろうと思って今日は私が田舎に遠足に行ったときのお話をしましょうね。このお話は日本人がどんな暮らし方をしているか、私たちとは違った変わった暮らし方をしているのを少しでも貴方に理解して貰えるのではないかと思います。

一緒に行った人は、バラ宣教師と彼の二人の娘と小川夫妻と二人の立派な日本人のクリスチャンでした。遠足

に行つたというのは、この湾の反対側に住んでいる人々が横浜の宣教師たちの教えについていろいろ聞いていて以前そちらに住んでいた小川さんにイエス様について話すことのできるクリスチャンの先生を一人連れてきてくれないかと頼んできたのです。私たちはそれは素晴らしいことだと思いました。私たちは聖霊の力によって、その人々が真理を受けられるようにいつも祈ってきましたので神がその祈りに答えてくださったのだと強く感じました。そこでバラ宣教師と小川さんが行くことになったのですが私にも一緒にいくようにと言いましたので行くことにきまつたのです。

私たちは日本の小さな船にのつて湾を渡っていきましました。それはとても変わった面白い経験でした。この船はおかしな格好をしていて私たちの国の小船とはまるで違うのです。その日は風がひどく強く吹いたので私を含めて何人かはひどい船酔いにかかってしまいました。それで私は縄や板切れなどが置いてある船底で寝ていなくてはなりませんでした。そ

してとても気分が悪かったので船が向こう岸についたとき起きて岸にあげられないんじゃないかと思うほどでした。

船が止まってまもなく船酔いはよくなったのですが、そのとき私たちが見たものは何だつたと思えますか？ 何とまあ、船は岸から一マイルほども手前に止まっていたのですよ。水が浅くなつて船は砂のなかに埋まって動けなくなり、それ以上は岸に近づくことができないのです。まったくお手あげです。そうでしょう？

でも、この人たちはそんなことは慣れつこになつているらしく余り気にもしていません。そして、ここでは水夫たちのことを「船頭」などと呼んでいるのですが、この人たちが船のへりをまたいで二フィートほどの深さの水のなかに入り私たちを背中におぶつてむこう岸まで運ぶというのです。このありさまを見て私の船酔いはすっかり吹きとんでしまいました。なぜかという、人々が船頭におぶつて貰つて向こう岸に運ばれる様子がとてもお

しくて大笑いしてしまつたからです。でも、私にはとてもあんなやり方で向こう岸に行く事はできないのでバラ氏に二人で腕で椅子を作るやり方（運動会などで騎馬戦のとき、よくこうした腕のくみ方をする）を船頭たちに教えてやってもらえないかと頼みました。それはどういふふうにやるか貴方に判りますか？ その上なら座れるかもしれないと思つたのです。だつて足をひろげて男の人の背中におぶさるなんて私にはとてもできなかったのですよ。

さて、そこで船頭たちはバラ宣教師に教えられたように腕で椅子をつくってくれました。そして私はその上に乗って進み始めました。最初は結構うまくいったのですが岸まであと半分というところで船頭たちの腕が次第にゆるみ始めたのに気がつきました。そして、とうとう私は彼等の腕からすべりおちて水のなかに投げ出されてしまつたのですよ。私はおかしくてあんまり笑つたので暫くは歩くことさえ出来ませんでした。でも、やっと歩きだし岸までの浅い水のなかを歩いて無事に乾いた土の上になど

つくことができました。岸には先についた人々がみな立って私を見て笑っていました。この経験は私のために大変よい教訓になつたと思つています。これからは自分が他の人よりもっと賢いとか良いなどと思ひあがることをやめ、もつとこの国の人々のしてゐるようにして、最も良いやり方を学ぶようにしたいと思ひました。

私たちが海岸に着いたとき、近くの人々や子どもたちが物見高く集まって来ました。人々がなぜそんなに私たちのまわりに集まってきたのか、あなたは不思議に思ふかも知れませんがこの土地の人たちにとっては白人や白人の女性を見るのは生まれて初めてのことだったので。

予定から少し遅れ、私は「乗り物」に乗つて、他の人たちは馬に乗つて私たちが招待されている人の家がある田舎の方に向かって出発しました。「乗り物」というのは、高さと幅が三フィート位の四角い箱で人ひとりが座るのに丁度ぐらいの広さなのです。この箱の中では乗る人は足をびったり折つて、

“仕立てやスタイル”で座らなければなりません。箱のてっぺんには一本の棒がしっかり渡されていて二人の男がその棒を肩にかついで進んでいくので



す。最初は快適でしたが、やがてすぐにこのように足を折ってじっとしている姿勢に疲れてきて、おまけに乗り物の揺れで船酔いのとときと同じように気分が悪くなってきました。

さて、私たちは美しい田舎道を通って行きました。私は百姓たちの暮らしぶりや田畑のようすなどを見ましたが珍しいものが沢山あって、全部を貴方にお話したいのですが今は少しだけでもお話ししましょうね。日本ではどこに行っても、お米が植えられています。この国では、お米が主食なのです。日本の人々には私たちがいつも食べているパンを食べないでその代わりにお米を食べているのです。お米をつくっている田んぼはいつも水でおおわれています。そして、じゃがいもや豆や大根など他の作物を作るときは土をフリーストばかり地面より高く盛りあげてその上でこれらの作物を育てています。こうした小さい四角い田んぼや畑が見渡すかぎり続いている様々な色の違った作物が育っているのを乗り物の中から見るのは本当にきれいで珍しいものです。

それから、この土地の人々は梨の木を栽培するのにとても面白いやり方をしています。梨の木を長い列になるように木と木をかなり近づけて植えています。そして七、八フィート位の高さまで成長すると枝をまげてお互いからみあうように紐で結びます。やがて木々が適当な高さまで育つと、その下はまるで長いホールか通路のようになり両側に規則的な木の柱がたち並び、頭上には美しい緑の葉がうっそうと茂ったすてきな天井ができあがるのです。高いところからこうした梨園を見おろすとまるで緑一色の床だけがあるように見えます。このように梨園を手入れするのはいろいろと大変な苦勞がいるものです。それは本当に美しいものですが梨の実はまだ美味しいとは言えません。陽が通らないからなのでしょうね。太陽の光って大切ですね。

私たちが泊る家のご主人はアルパニーのバトルーン氏に似ています。彼は大変お金持ちで何百人もの家来をかかえているのです。これらの人々は正確には下男というわけではありませんが彼の支配下に

あって庇護されています。彼の家はとても大きくて堀または水路のようなものに囲まれています。これは敵が攻めてくるのを防ぐために作られているのです。私たちは大きな石の橋を渡りどっしりとした門がまえのある道を通ってとても大きな広場にできました。周りには大小の沢山の家々が並んでいましたがどれも美しくきちんとしていました。

私たちはこの広場をとおりぬけ、もう一つのあまり大きくはありませんがとても優雅な門を通って庭へと入っていききました。その庭はすばらしく美しいもので、小さな湖や滝がありミニチュアの山や洞窟、岩屋、橋などがあり、いろいろな種類の樹木が植えられていました。ところがその樹木というのが常緑樹で、船や家、犬、鳥などの形に刈り込んであるのです。その完璧なほどのすばらしい技術を貴方にわかってもらえるかしら？

さて、私たちはとても丁寧に迎えられて家の中へ通されました。でもそこには私たちの考えにそぐわない物が沢山置いてありました。ある物は私たちか

ら見ると、かなり野蛮なものに思われました。でもこの家の人たちはそう思っていないでしょうから私たちがこれは変だなどと言うのは差し控えておきました。

私たちがどこへ行っても閉口したのは―これはお金持ちの人々にも貧しい人々にも同じことが言えるのですが―外国人の着ている服や持ち物を物珍しうにジロジロと見られることです。

日本人は私たちのようなベッドを使わず床の上じかに寝ていても重たいふとんをかけ、木で作った枕を使って寝ています。私たちにはそのような木の枕では眠れませんので自分の使っているシーツと枕を持っていきましました。また、私たちは日本人の食べ物もあまり食べられないので肉や果物の缶詰やパンやバター、ケーキなどを包んで持っていきました。

私たちが食べ物の包みを開けたとき、この人々の物珍しげな様子といったら、本当に面白いものでしたよ。この家のご主人やお年寄りのお母様、そし

て家来たちの小さな子どもたちに至るまでみんなが包みの中に何が入っているかと私たちの周りに集まってきました。

こうした日本の名士の家では家来たちや家来の子どもたちがまるで家族の一員であるかのように自由で親しみがあり、それでいて彼等はいつも礼儀正しく自分たちの立場をよくわきまえているのです。また、家来たちは主人から大切にされていて、私にはどっちが主人でどっちが家来なのか判らないほどでした。

ここのご主人がとても親切でいろいろと私たちのために気を使って下さるのに私たちは自分たちのために食べ物を持っていったことを本当に申し訳ないと思いました。でも、どうしてもやむをえなかったのです。今のところ、卵、鳥肉、魚、じゃがいも以外は食べるのできるものがないのです。でも、たぶん少しずつ私たちも日本の風変わりな料理になって好きになるかと思えます。

「おばあちゃんの手紙」があまり長くなりますの

で今日はこれくらいにしておきましょうね。あまり沢山、面白いことがあったので残りはこの次にまた書きたいと思います。

“神様がアメリカにいる私の可愛い子どもたちみんなを祝福してくださいますように”

おばあちゃんより

*

十二、

横浜 一八七二年十月十二日

愛するパーティーへ

だいぶ前のことだけですが東京湾の向こうの地方に遠足に行ったお話をしましたね。さて、今日はそのお話の残りをアメリカにいる貴方たちにしましゅうね。…略…

佐久間さんの家で過ごした最初の晩―佐久間さんというのは私たちを招いてくれたご主人の名前で―その家の人たちはとても親切で私たちにベッドを

用意してくれたのですが、それは大きな木のドアをはずして持って来たものでした。床の上に幾つかの大きな木片を並べ、その上にドアを置いて床から高くなるようにし、そのドアの上に何枚かの赤いウールの毛布を敷いてくれました。この家の人たちとしては精一杯のおもてなしだったのです。なぜなら当時の日本ではまだウール製品は使われていなかったのです。日本人々がウール製品の何かを見たのはごく最近のことなのです。外国の商人たちがいろいろな色の毛布を日本に持ってきて日本人がこれをとてゝ気にいったのです。そしてこれらの毛布を買う事のできるお金持ちの人たちは自分たちがこういう毛布を持っている事を誇らしく思っていましたからこの家のご主人もこの時とばかり新しい毛布を使って私たちを喜ばせようとしたのです。

私たちはそのベッドに寝てみましたが毛布を敷いてあるだけですから、堅くてどうも寝心地が悪く畳の上にそのまま寝る方がまだましという結論に達したのでした。

次の朝、私たちが朝食の仕度を始めるとその家の人たちが今度はドアをテーブルになるように整えてくれました。そして、その上にあの赤い毛布をテーブルクロスとしてかけてくれたのです。はっきり言つて有難迷惑なことだったのですがせつかくの好意に対して何も言えませんでした。そこでこのテーブルの上で食事をしたのですが毛布の上に食べ物をごぼさないようにとても気を使いました。

朝食がすむと私たちは十二マイルほど離れた鹿野山という山に登る仕度をしました。そこは美しい景色と山頂にある大きな古いお寺で名高いところでも有名でした。私たちはその場所から九十九の谷々を見下ろしました。谷の間に小さな村や田畑が点々と散在し、それらが美しい眺めをさらに魅力あるものにしていました。

私たちはこの山頂で激しい雷雨に見舞われました。…略…(幼い頃、嵐の日に母がひざの上で教えてくれた詩を書き、嵐のなかにも神がおられること

を記している)

嵐は長く続いたので私たちは一晩じゅう、山頂にいなければなりませんでした。寢床も私たちのための食べ物もありませんでしたが何とか無事に過ごすことができました。でも、あんな激しい雷雨の様子や翌朝の輝かしい日の出の光景をこの目で見られたのですもの、少しくらい苦しかった事は仕方ないと思いました。

その日の夕方、私たちは佐久間さんの家に帰りました。私たちが前もって頼んでおいたようにバラ宣教師がその人たちをみんな集めておいてくれたのです。そこでキリスト教とは何かということをお話することになっていたのです。…略…

ちょっと、想像してみてください。まわりが壁で頭のうちは真つ暗やみの大きな部屋、一方の側にわずかの薄暗い行燈がまばらに置かれ、もう一方の側には大きな祭壇か神だながあるのです。この祭壇のなかには三十ほどの大小の偶像があつて日夜この家族たちが拝んでいるのです。この部屋の一方にかな

り多くの、たぶん五十人か六十人の肌の薄黒い頭のはげた（この国の男性はみな頭のとっぺんを剃っているのです）人々が床のうえに座っていてもう一方にはバラ宣教師と私たち、そしてこの家のご主人が家族と共に座っていました。これで、この集まりがどのような光景だったか貴方に判ってもらえるかと思いますが、これはこの地方で初めてイエス・キリストの名前が人々に知らされた集会だったのです。

ここの人々があんなに熱心に福音に耳を傾けようとしているのを見て私は本当に喜びで胸が一杯になりました。人々はバラ宣教師が話しているのを誰も止めさせようとはせず、夜の十時過ぎに話が終わると小川さんに質問して十二時ごろまで質疑応答が続けられました。∴以下省略∴

二回にわけて書かれた手紙は同年五月に横浜から東京湾を船で渡って房総半島へ旅したときの記事である。

ユーモラスな事件が幾つかあり、百二十年前の日本が異

国のように思われる。今の私たちには木の枕ではとうてい眠れそうにない。ドアをベッドやテーブルに使おうと考えたり、赤い毛布をテーブルかけに使ったり、とても滑稽な話であるが当時の日本ではこれが精一杯のおもてなしと考えたのであろう。

雷雨に見舞われた鹿野山は標高三五二米、上総国の最高峰で山頂に聖徳太子ゆかりの神野寺があり参詣客が多く、江戸時代は上総から安房への街道が鹿野山を通過したので門前町兼宿場町として栄えたところである。現在は近くにマザー牧場が開設されている。

紙数の都合で二回目の手紙の最後は省略したが旅の目的であるこの地方でのキリスト教伝道について書いている。当時の集会は行燈の薄暗い光のなかで宣教師の話を熱心に聞いたものであるが野次がとんで思わぬ危険があったり、キリスト教伝道は大変困難な時代であった。

（国立音楽大学）